

滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト“SANPOh”

令和 4 年度焚き火ミーティング(第 2 回)
「地域の特色ある文化と共生社会のつながり」

日時:令和 4 年 9 月 28 日(水)19:00-21:00

場所:オンライン

参加者:13 名(うち、関係者 5 名)

「地域の特色ある文化と共生社会のつながり」について

滋賀には、伝統行事や芸能をはじめ、魅力ある多様な文化が地域ごとに根付いています。東日本大震災や、新型コロナウイルスの蔓延という困難は、こうした「地域の特色ある文化」が、地域に住む多様な人々の心をつなぐ力を持っていることに気づく機会となりました。地域の特色ある文化と、多様な人がお互いを尊重してともに生きる「共生社会」とのつながりについて、参加者と意見交換をしました。

○参加者の主な意見

①長浜曳山祭について

曳山祭の中では、子ども歌舞伎が注目されるが、曳山祭に関わる様々な世代の人たちはそれぞれ自分たちが祭の主役だと思っている。町内ごとに代表者を出して話し合いながら作ってきた、町衆によるボトムアップの祭であり、若い世代の人たちが主体的に市内の文化事業に関わる土壤もこうした気質から生まれてきたように思う。

長浜曳山祭…ユネスコ無形文化遺産に登録された約 400 年続く長浜八幡宮の祭礼。曳山は、山車の上に舞台があり、小学生までの子どもがその上で歌舞伎を上演する。全 13 基ある曳山のうち、毎年 4 基ずつ交代で巡行される。

②朽木古屋の六斎念仏について

踊りを習うといっても、同じものをそのまま受け継げば良いということではない。現地を訪れ、保存会の人たちと交流を重ね、生活に触れることで、生活の中で踊り継がれてきたということを実感してもらうことが大事。関わる人たちの価値観が少しずつ違う中、時間をかけて大事にしたい部分を擦り合わせていった。

朽木古屋の六斎念仏…1998 年に無形民俗文化財に選定された民俗芸能の踊り。伝承者の高齢化と後継者不足により一時休止していたが、2015 年に踊りを映像に残すプロジェクトが始まったことを機に、伝承していくための機運が高まった。2016 年、民俗芸能に興味のある身体表現分野のアーティストたちが現地に滞在し、伝承者 4 名によって構成される保存会から踊りを習うようになる。その様子を見た伝承者の孫世代も発奮され、3 名が保存会に加入。コロナ禍、オンライン稽古を実施しながら、継承を模索している。

③自由意見

- ・少子化によって存続の危機にある芸能も多いが、これを機に、男性しか参加できない祭が女性の参加に門戸を開く動きもあり、転換点になっているのではないか。
- ・昔ながらのものを形を変えずに続けていくことも大事だが、時代に応じて女性が入れるようになったり、外国にルーツを持つ人が引き継いだりできる時代になっていくべきとも思う。伝統芸能として続いてきたことも時代によって変わってきている。
文化には、継承する本人たちも気づかないうちに、時代に合わせ自然と変わっているものもあるのかもしれない。
- ・誰もが参加するようなものに対して、そこに加わりたくない人、参加しづらさを感じている人のことも考えたい。本当は、それぞれの人やりたいと思うお祭をできると良いと思う。お祭があること自体、大事なことだと思う。熱く関わりたい人向けのお祭の他に、しんどくならない程度に関われるお祭みたいなものもあり、お互いがうまく共存していけると良いと思う。
- ・日本生まれ日本育ちの外国人の子どもたちとの活動をしている。今回のテーマは、直接的に関係ないと思っていましたが、皆さんの話を聞く中で、日本で、彼らの母国の伝統や文化を継承することを考えさせられた。